





2020年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都市 】

学校名【 朱雀第六小学校 】

1 実践テーマ	I・II・III・IV・V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	朱雀第六小学校5年1組 24名
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名 (総合的な学習の時間「共に生きる」)</p> <p>② 行事名 ()</p> <p>③ その他 ()</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名 ()</p> <p>② その他 ()</p>
4 目標 (ねらい)	<p>京都にゆかりのある身障者スポーツ選手と交流することで、選手ご自身の努力や思い、自分(児童)たちへの願いを知ること、自分たちにできることは何か、できないことはないかを考え、行動につなげていく学習を進める。そして、これからの自分自身の生き方に対しても考えるきっかけとしていきたい。</p>
5 取組内容	<p>事前学習として、2020東京オリンピック・パラリンピックについて歴史や種目、選手などについて調べ学習を進めた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>後半には身体に障害のある人たちが自分の限界に挑戦されている姿にも目を向け、学習の場を広げていった。</p> <p>11月18日(水)に、アテネ・北京パラリンピック競泳に出場・入賞されている北村友里選手(京都スポーツの殿堂入り)から、ご自身が障害を負った経緯や選手として活動していくに至った経緯、その中で努力したことなどを大会の映像を交えながら聞いた。選手村や競技場でのエピソードから表面的から気づけない点にも触れることができた。北村選手の幅広い考え方や競技に真剣に取り組んでおられる姿勢から、自分たちの過ごし方に対して考えるヒントを多くい</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

ただけた。

11月27日(金)に、車いすバスケットチームの山本英嗣選手・東武志選手に来校いただき、車いすバスケットのプレイを見せてもらった後に競技用車いすを体験した。その後、選手の方と共にゲーム形式の競技に挑戦した。体験後に、背髄損傷となった交通事故のこと、その後のリハビリと競技との出会い、仲間の大切さなどのお話を聞いた。



事後学習として、パラリンピックのことだけにとどまらず、人にやさしい街としていくために、どのようなことを進めていけばよいかを話し合い、自分たちに身近な地域の様子を見直し、12月16日(水)に校内の他学年の児童へ発信した。本年度は、コロナ感染防止のためzoomによる発表となった。



6 主な成果

事前学習では、パラリンピックや障害者スポーツに対して調べているものの、あまり実感がわかず関心をもちにくい様子だった。また、車いす競技を体験することに不安感をもつ姿も見られた。しかし、実際に体験談を聞くと、集中して聞くことができていた。さらに、車いすの操作や競技を体験することで、その世界の魅力に気づき、飽きることなく活動を楽しむことができた。

座学での調べ学習でおおまかな全体像をつかんだ上で、車いすの操作や競技の体験をすると、子どもたちは興味を抱きやすかったようだ。「おもしろいな」「もっとやってみたいな」という気持ちを持続させた状態で、選手の競技への思いや障害を負うに至った経緯を聞くと、その内容が心に響くものとなった。その結果、自分たちにできることは何か、何をしていかなければならないかという視点をもって、事後学習に取り組むことにつながった。

7 実践において工夫した点(事業の特色)

今回で4年連続の取組となる。学校としての受け入れ態勢や指導の流れや準備物も定着してきた。今年行われるはずのオリンピック・パラリンピックが延期となり、学習を通していろいろな競技に対する子どもたちの関心も増してきたように感じられる。

本物に触れる・出会うという体験は、子どもたちにとって大きな財産になる。限られた時間や場を有効に使えるよう、事前に講師の方との打ち合わせを進め、単に面白い・興味をもてたというだけでなく、選手の皆様の生きざまにも目を向けられるように、体験談を語るタイミングや映像の活用などを相談して進めることができた。

児童の実態から事前学習において、興味関心を高めておくことが必要と考え、オリンピックやパラリンピックの歴史やいろいろな競技の様子を調べ、体験本番への意欲づけとなるように

	<p>した。実際に話を聞いたり実践したりすることで、難しさや面白さに気づき、子どもたち自身が自分たちの日常生活の在り方にまで考えを広げられるようになったと感じている。このことは事後学習としてのまとめにも効果的であった。</p>
8 主な課題等	<p>昨年度とほぼ同じ形で実施でき、講師の方にも依頼することができた。本校の場合、両講師とのパイプができていてスムーズに実施に向けて動き出すことができた。講師の方をどのように探し、依頼していくかという道筋がはっきりしていることが取組の広がり結びつくと思っている。そして、謝礼や必要経費などの金額の目安も明示されていると計画しやすくなると思う。</p> <p>校内の設備面からみると、まだまだバリアフリーとは言えない。車いすでの生活をしている子どもも在学していることや利用される地域の方も高齢の方が多くおられることから設備改善が進むことが望ましいところである。</p>
9 来年度以降の実施予定	<p>大変意義のある学習の場と考えているので、継続した取組としていきたい。支援事業としては最終と聞いているので、校内予算で対応するしかないが、何らかの形で支援されるシステムがあればありがたい。</p> <p>現段階では校内での啓発にとどまっているが、カリキュラム・マネジメントの見直しの中で、校外へも目を向けられるよう発展させていけるように進めていきたい。</p>